



## 巻頭インタビュー

狂言師

# 野村萬齋

のむら まんさい 1966年生まれ。幼少期より、祖父・六世野村万蔵、父・野村万作に師事。1989年東京芸術大学音楽学部邦楽科卒業。94年萬齋を襲名。同年文化庁芸術家在外研修制度によりイギリス留学。ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー他で学ぶ。国内外で多数の狂言・能公演に参加、普及に貢献する一方、テレビや映画・現代劇の主演、古典の技法を駆使した作品の演出など幅広い分野で活躍する。昨年、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開閉会式演出チームの総合統括に就任。

## 「地球あたりの者でびびる」 狂言のまなざしでオリンピック・パラリンピックの精神を描く

聞き手・編集部

——萬齋さんは海外でも数多く公演されています。

萬齋 父が早くから海外公演に力を入れており、小学生の時から帯同していました。最初は九歳の時、場所はハワイ

でした。父がハワイ大学の客員教授を務めていた関係です。演目は「井杭<sup>いぐい</sup>」でした。その二年後には、パリ、ロンドンで「鞆猿<sup>つぼざる</sup>」の子猿役を演じています。それから現在に至る

まで、米国、欧州、中国、ロシア、オーストラリア、マレーシアなど、多くの国で公演をしています。父と同様、私も海外公演・文化交流には重きを置いています。

### 日本文化の浸透を実感

——特に印象に残った公演はありますか。

萬齋 一九八九年のモスクワ・レニングラード公演は忘れがたいですね。ロシアではなく、ソ連末期です。ペレストロイカの只中にあり、町にはモノがなくて、商店は開いているのに、商品は陳列されていない。至る所に行列ができています。でも、あるところにはあるんです（笑）。政府高官や海外の賓客だけが行けるレストラン、お金を出せば空輸された食材で調理される日本食……。二五〇〇円のかつ井は衝撃でした（笑）。

モスクワでは、舞台でのお客様の反応も違いましたね。ニューヨークやロンドンには、世界中のエンターテインメントが上演されていて、観衆も異文化に対して寛容というか、関心が高い。しかしソ連はまだそのような状況ではなく、まったく初めての狂言に満員の客席が衝撃を受けていたようでした。「茸<sup>くまひら</sup>」という演目でキノコの扮装をして舞台上になると、海外ではたいがい爆笑が起ります。でもこの時

はお客様が「なんだこれは？」と戸惑っているのを肌で感じました。ちよつと引き気味というか……。

その代わり、公演後は万雷の拍手があり、すごい勢いで楽屋に人が押し寄せてきました。モノがない時代に、「野菜不足になっちゃいけないから」とトマトを差し入れてくれた女性や、三日間公演に毎日足を運んでくれて、最終日に自分の好きな音楽のレコードをプレゼントしてくれた人もいました。新しい文化を経験できたことに対する感謝の気持ちで、自分も何かお返し交流をしたい、という気持ちだったのかもしれない。

——ロンドン留学もご経験されています。

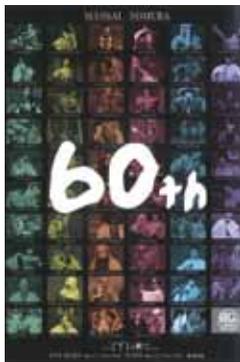
萬齋 九一年にロンドンでシェイクスピアを翻案した新作狂言「法障侍<sup>ほむろひざり</sup>」を演じたことがきっかけでした。英国のジャパン・フェスティバルの一環でしたが、それが縁で九四年には、文化庁の芸術家在外研修制度で留学し、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーなどで演出を学びました。これも貴重な経験でした。

——昨年は、日中平和友好条約四〇周年を記念した中国公演も行われました。

萬齋 私が初めて中国を訪問したのは八〇年代初頭、十五、六歳の時です。北京の街頭にはまだ人民服を着た人

左・2001年にロンドンのグロブ座で上演された「まちがいの狂言」。原作はシェイクスピアの「まちがいの喜劇」(提供・万作の会)

下・今年10月26日、30日に公演を控える萬齋氏主宰の狂言会「狂言ござる乃座」60回記念公演ポスター。詳しくは「万作の会」HPまで



がたくさんいて、紫禁城の前でポラロイドカメラを出すと、物珍しさに人が集まってきました。写真を撮って渡すと、とても喜んでくれて……。その当時を知る者としては、海外資本のホテルが立ち並び現在の姿は、まさに隔世の感がありますね。

同時に、中国における日本文化の浸透も実感します。政府間ではごくしゃくすることがあるかもしれませんが、文化と文化、人と人とのつながり、日本への関心の強さは肌で感じます。このところ三、四年に一度くらいのペースで中国で舞台に立ちますが、熱心なファンの方もいらっしやって、楽屋前に行列ができるんです。日本ではあまり見なくなった光景です(笑)。狂言好きの方も多いですが、映画「陰陽師」をきっかけにファンになってくれた人も少なくないようです。

### 字幕の活用で幅広い作品を上演

——日本と海外では演じ方は変わりますか。

萬齋 近年はプロジェクターで現地語の字幕を出すので、内容はかなり理解しやすくなっていると思います。その分、翻訳には神経を使います。例えば「附子」という演目があります。主人が隠し持っている砂糖を、留守の間に使用人

が食べてしまう話です。当時の砂糖は未精製で茶色い水あめ状のものなんです。だから「シュガー」と訳すと、海外の人たちが想像するものとは随分違ってしまいます。かといって、くどくどと説明するわけにもいけません。だったら「ハニー」と訳してしまおう、と。蜂蜜であれば、どろどろした茶色い甘いもの、というニュアンスにぴったりですよ。翻訳家と密に相談しながら進めています。また、翻訳の場合は、多少は古雅な匂いを残しつつ、わかりやすく伝えることを旨としているので、日本以上に公演の手ごたえを感じることもあります。

加えて、字幕に凝ることができるので、かつては動きが少なく海外では敬遠していた曲も演じられるようになりました。特に父が演じる「川上」や「月見座頭」といった盲人を扱った演目は、動きが少ない代わりに、内面的にはとてもドラマティックな作品ですが、近年は海外でも好評を得ています。障害という現代にも通ずるテーマで、古典と呼ぶにふさわしい普遍的な感動が共有されるのだと思います。

——このあたりが狂言の奥深いところですね。

萬齋 狂言は海外でコメディやファルスといった「笑いの劇」として紹介されることが多いのですが、狂言の本質は

人間の活写です。人間の小さな欲求——お酒が飲みたい、甘いものが食べたい、でも食べられないから嘘をつくといった小さなものから、夫婦間の感情や先ほど述べた障害の話にも、人間の欲求が詰まっている。そういう日常に根ざした、いつの時代でもどこでもありそうなことを描いている。人間を活写するというのが、われわれのひとつのドラマツルギーなのです。

それを最も象徴するのが、「このあたりの者でござる」という台詞です。狂言の舞台ではお決まりの第一声ですが、どの誰かを特定しない、普遍的な人々を表しています。時代や文化を越え、時に言語をも越えて、どこにでもいる人。人間をそのように映すことが、狂言の根幹にあるのです。

### 前代への敬意が積み重なる日本文化

——日本らしさの根幹となる精神ですね。

萬齋 加えて、そういう日常に根ざしたドラマを、できるだけ単純化しながら、かつ奥深く見せる演出のあり方が、日本的ですよ。圧倒的な力や物量といった派手さではなく、余分なものを削ぎ落としたスマートな舞台。それは禅の思想を受けた中世文化が反映されています。そういうと

ころに日本的なものを感じます。

もう一つ、私が日本文化の特徴と考えるのが、日本が歴史的に享受してきたさまざまな外部の文化や前代の文化を受け継ぎながら、熟成されている点です。大陸からの文化、それを日本的に受容した中世の禪文化、武家の時代を経て、商人が活躍し始めると賑やかに傾く世界が生まれ、文楽の人情の世界もある。各時代で成立した文化が、後世で否定されることなく、蓄積され共存している。私は発酵文化と呼んでいます。シルクロードの吹き溜まりにさまざまな文化が重層的に堆積し、時に化学反応を起こしてまったく異なるオリジナルなものが生まれる。シルクロードの端っこが最先端のハイブリッドというのも、面白いじゃないですか。

——萬斎さんご自身も、テレビや映画、現代演劇などさまざまなジャンルで活躍され、日本文化の重層性を体現されています。

萬斎 現代の情報網に乗る、という意図もありますね。昔は新聞を広げれば、自分の関心があるがなろうが、見出しを眺めるだけで世界のいろいろな事象が目に入りました。しかし今はスマホの時代です。自分の好きな情報は無限に得られるのに、そうでないものはまったく引っかかり

ちゃらけたことだけやってはだめだ」と言い聞かせていました(笑)。

## オリンピック・パラリンピックの精神

——萬斎さんは、約一年後に迫った東京オリンピック・パラリンピックの開閉会式における演出の総合統括を担わられています。

萬斎 私が総合統括のお役目をいただいたのは、先ほどお話ししたような、「このあたりの者でござる」の精神を体現してくれ、ということなのだと思っています。

実際にどのようなコンセプトとして発信するかは、発表までしばしお待ちいただきたいのですが、「このあたりの者でござる」というのは、大きく見ればみんな「地球あたりの人」ということでしょう。

それくらい俯瞰して見ると、人間なんて身分が高かろうが低かろうが、金があるがなかるうが、あるいは顔の造作がよかろうが悪かろうが、生きている存在としてはみんな平等である、そういう発想です。再び狂言に引きつけて言うと、狂言の登場人物はほとんどが名前を名乗りません。どんなに偉くて名前があるが、あえて明かさず、ひとり一人の人間として見ると、フラットな精神があるのです。

ない。狂言という枠の中だけではアプローチできない層に、どのように関心を持ってもらうか。そういう戦略的な面は意識しています。それに、他ジャンルを知らないのに「狂言は良いですよ」と言っても、説得力に欠けますよね。己を知るために、海外に出かけ、他ジャンルにも挑戦する、という感じですよ。

——影響を受けた他ジャンルの作品はありますか。

萬斎 もちろんたくさんありますが、まずは小学生の時に父に連れられて観たチャップリンですね。どうせやるなら、これくらいの世界的コメディアンになりたいなあと、思うこともありました。母はビートルズやカーペンターズが好きで、私も影響を受けて洋楽を聞き始め、そのうち、ロックスターを目指したくなった時も……。

ある程度成長してからは、父からチケットをもらって劇場に足を運ぶようになりました。京劇は好きでした。カントール演出の前衛的な舞台に衝撃を受けたり、モーリス・ベジャールが振り付けた「ボレロ」が格好良くて真似してみたり。真似といえ、マイケル・ジャクソンのダンスもよくやりました。もう一人挙げれば、スペインのダンサー、アントニオ・ガデスです。彼は舞台上に立っただけで、全ての空気を変えてしまふ。本物に触れることで、自分に「お

しかも人間だけでなく、猿や狐や狸も出てくる。日本的に言えば八百万の神のように、全てのものには魂が宿る。言い換えれば、全てのものに存在意義を認める、という考え方です。

——オリンピック・パラリンピックはその精神を表現する場である、ということですね。

萬斎 そう思います。大仰かもしれませんが、われわれの存在は、実に不思議な掛け合わせによって、太陽があり、水の惑星が生まれて、生命が誕生した偶然の結果にすぎません。オリンピック・パラリンピックは、そのことに感謝し、四年に一度、生命力を燃やし競いあうことで、自分たちの存在意義、共に生きていることを称えあう祭典なわけです。そこは、例えば世界選手権といったほかの大会との決定的な違いです。

そしてそのようなまなざしは、狂言の世界と大いに共通します。平等、共生、インクルーシビティ(包摂)、ダイバーシティ(多様性)は現在のトレンドですが、日本人は昔から「このあたりの者でござる」と受け入れてきたのです。そういう私の狂言の精神みたいなものが、開会式・閉会式のいろいろなところで隠し味になっていくのではないかと思います。●